

書写指導と「伝統的な言語文化」の 指導の相互補完的連携のあり方に関する考察

松本 仁志・磯野 美佳*
(2012年12月7日受理)

Considerations Regarding the Way Teaching “Shosha” Should establish a Mutually Complementary Relationship with Teaching “Traditional Linguistic Culture”

Hitoshi MATSUMOTO and Mika ISONO

Abstract. This study discusses the way of developing a mutually complementary relationship between teaching Shosha and traditional linguistic culture in order to make Shosha attractive to students. Based on the classes of Shosha at a junior high school level, the study views the mutual relationship from the standpoints of its aims and methods, and presents what remains to be seen.

はじめに

明治33年に国語科が成立した際、それまでの「読書」「作文」「習字」の3教科は、それぞれ「読み方」「綴り方」「書き方」（「話し方」「聞き方」として国語科の構造内に位置付けられ、相互の関連を図ることが企図された。当時の国語科の構造は、スキルの習得と人格陶冶の二元的目標観のもと、スキルの習得を理解的言語活動と表現的言語活動とに分けて把握し、「読み方」（と「聞き方」）を理解に、「綴り方」「書き方」（と「話し方」）を表現にそれぞれ位置付けていた。理念上は「書き方」と「綴り方」との連携を図る意図があったのである。

しかし、実践の場では、「書き方」となった後も「習字」時代と同じように手本を練習して清書で終える〈自己完結型〉の授業スタイルをほぼとり続け、そのまま今日の「書写」に至っている。昭和43年に毛筆書写が国語科で必修化されて以降、小・中学校の学習指導要領上には、「書くこと」領域や「文字に関する事項」との連絡を密にするよう一貫して示されてきたが、書写の授業の

場が劇的に変化したということはなく、理念と実際の乖離は続いている。書写が国語科の中でその目標を達成するために、いかに機能できるか、機能すべきかという点を改めて明らかにし、実践へ向けた道筋をつけることが未だに国語科書写の重要課題として残っているのである。

このような課題意識のもと、松本は『「書くこと」の学びを支える国語科書写の展開』(注1)において、「書くこと」領域の学習と書写学習との連携のあり方について理論・実践の両面から具体案を提案した。本稿は、その一環として、「伝統的な言語文化に関する事項」（以下「伝統的な言語文化」）と「書写に関する事項」（以下「書写」）との連携のあり方について考察するものである。磯野の単元「百人一首カレンダーを作ろう」（中学校第3学年）の実践を踏まえて、相互補完的連携のあり方の可能性と課題とについて考察する。

1. 連携の現状

「伝統的な言語文化」の学習は、小学校では総じて音読・暗唱などに重点が置かれている。しか

*広島大学附属中・高等学校

しそれだけではなく、例えば〈故事成語〉の学習を生かして物語を書く、「枕草子」「徒然草」などの学習を踏まえて随筆を書くなど、「書くこと」領域の言語活動例と連携させた実践も積極的に行われている。

書写の教科書上でも、これまで短歌や俳句などを中心とする「伝統的な言語文化」の素材が硬筆や小筆の関連視写教材として採用されてきた。しかし、それらはあくまで書写スキルの学習や書式の学習を前提としたものであり、活動としては視写するだけで終わりという扱いであった。すなわち、古典素材を書写することに、スキル学習としての意義以外の意味を見出そうとする学習は想定されていなかったのである。

一方、「伝統的な言語文化」では、文語調の文章のリズムや故人のものの見方・考え方などの学習が主目的であり、古典素材を書くという活動には特に意義を見出そうとはしてこなかった。故人は、散文や韻文などを読むだけでなく短冊、色紙、料紙などに毛筆で書くことも含めて文化として楽しんだのであるが、いつの間にかその部分が切り離されてしまい、特に問題視されてもこなかった。

2. 相互補完的連携のイメージ

このような現状を踏まえると、「伝統的な言語文化」と「書写」の連携を図るには、それぞれの学習の主目的とは別の視点から相互が補完しあう関係性を見出すことが必要だと言えよう。すなわち、両者連携の可能性は、どちらかに偏ることなく「伝統的な言語文化」と「書写」の双方にメリットのある相互補完的あり方の中に見出すことが肝要である。

そもそも書写は文字を書く活動が学習活動の中にあれば、国語科のあらゆる領域と関わりを持つことが可能である。小学校低学年の指導事項である「昔話」「神話」「伝承」などは、読み聞かせを聞いたり、発表し合ったり、音読や暗唱をしたりすることなどが学習のメインであるので、書写との関連づけを強引にすることは適当ではない。一方、小学校中学年の「易しい文語調の短歌や俳句」「ことわざ」「慣用句」「故事成語」などは、これまでも書写学習で半紙や長半紙に書く配列・配置（字配り）の教材や硬筆の視写教材の素材となる

ことがあり、両者の関連づけには工夫の余地がある。また、小学校高学年の親しみやすい散文形式の「古文」や「漢文」、「近代以降の文語調の文章」なども、これまでの書写学習で主に硬筆の視写教材として使われてきており、両者の関連づけに工夫の余地を残している。（ただし、毛筆小筆を使った文字群の書写は技能的な難易度という点からあまり取り上げられていない。）

中学校においては、文語のきまりや漢文の訓読の仕方、古典の種類への知識、音読、朗読、古典におけもの見方や考え方、鑑賞、古典に関する文章を書くことなど、学習内容が多岐に渉る。その中で、古典素材の視写というパターンでの関連付けはもちろんであるが、他にも古典におけるもの見方や考え方、鑑賞などの学習との関連づけは可能性がある。

このように、「伝統的な言語文化」のすべての内容を技能学習である書写と関連付けられるわけではないが、工夫次第では部分的な連携が十分可能である。

しかし、「伝統的な言語文化」の学習との接点は、単に文字を書くという点だけでなく、文字通り「伝統的な言語文化」としての接点を持つことを再認識する必要がある。例えば、毛筆で和紙や料紙に書かれた古典の写本を見たり書いたりすることは、伝統的な言語文化の文字文化的側面を見ることである。広く言語文化の学習として構えれば、小学校においても中学校においても文化に対する理解という点での共通の意味付けができる。そのことが、「伝統的な言語文化」への理解の広がりを促し、書写の学習にもスキル以外の意義を見出すきっかけを与えてくれることになると思われる。

さて、以上のように、この両者をつなぐにあたっては、それぞれの目的を包括するような一段高い目的の設定が必要になる。そのキーワードが「言語文化」や「相手意識」だと考える。

書写サイドにおいては、広く文字文化の学習として構え、そこにスキルの学習も内容理解に基づく鑑賞の学習も取り込むのである。

一方、「伝統的な言語文化」サイドにおいては、文字は単なる記号ではないという捉えが必要になる。昔の人のもの見方や考え方を知るには、和歌や短歌を読むだけでなく、書いて、書かれた文

字を含めて鑑賞していたという点に着目しなければならない。その部分は書道の領域だなどと切り離す理由はそこには存在しない。短歌や俳句を小筆で書くことは技能的に難しいから、という理由は指導者サイドの理屈であって、子どもの理屈ではない。まねごとでもいいから連綿などの技法を使ったりして、書くことを追体験したいと思うのが自然である。

特に書写学習において古典教材が単なる視写する素材として把握されるだけではもったいない。そこに新たな意義づけをし、両者を包括する目的を設定することで、「伝統的な言語文化」「書写」双方に学習の深まり・広がりが期待できるであろう。

なお、「伝統的な言語文化」と書写との連携は、文化としての理解という点から考えて、「古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること」という指導事項が設定される小学校高学年から中学校の段階で実施するのが適当だと言える。

3. 連携の手段としての「単元を貫く言語活動」

方法としては、いわゆる「単元を貫く言語活動」の設定によって両者の連携を図ることが考えられる。「単元を貫く言語活動」には、学習の目的意識を明確にし子どもの学習意欲を高める効果が期待できる。両者連携でこの方法を使うことは、それぞれの目的を包括するような一段高い言語文化理解という目的の下で意味を持つであろう。

4. 単元「百人一首カレンダーを作ろう」の実践

ここでは、以上の趣旨を踏まえて、磯野の実践(注2)を捉え直してみたい。

(1) 単元の概要

① 実施期間

2011年7月7日(木)～9月16日(木) 全7時間

② 対象

中学校3年B組39名(男子20名, 女子19名)

③ 単元構成

[表1] 「百人一首カレンダーを作ろう」の計画

| | 時数/実施日 | 内容 |
|-----|-------------------------|---|
| 第1次 | 1時間/H23.7.7 | 担当頁にふさわしい歌を決めよう 【夏休み宿題】選んだ歌について表現技法等を調べ、鑑賞文を書く |
| 第2次 | 5時間(40分授業)/H23.8.31～9.8 | 選んだ歌の世界が魅力的にみえるように、書写しよう |
| 第3次 | 1時間/H23.8.16 | 鑑賞会 |

④ 単元観

④-1 単元について

本単元は、平成23年5月文部科学省より出された「言語活動の充実に関する指導事例集」(注3)(以下、事例集)に示された事例『『小倉百人一首』の和歌を鑑賞して文章を書こう～資料を引用して書く～』(国語-15)をもとに、「伝統的な言語文化」と「書写」の連携の視点から構成し直したものである。その際、事例(国語-15)の「感じたことを言葉にしたり、それらの言葉を交流したりすること」という趣旨を生かして構成するように配慮した。(→表2)

事例(国語-15)では、鑑賞したことを文章に書くことが活動の中心であるが、本単元では、和歌の鑑賞文を書くことからスタートして、それに百人一首を書写する学習を組み込む形をとる。書写学習における伝統的な文字文化の追体験によって、書写技能の向上のみならず和歌の鑑賞がさらに深まることをねらっている。

[表2] 事例集(国語-15)と本単元との相違

| | 事例集 国語-15 | 本単元 |
|-------|---|---|
| 単元の目標 | <p>関心のある和歌を小倉百人一首の中から選び、鑑賞したことを文章に書くことができる。</p> <p>⇒「B 書くこと」(1)イ</p> | <p>① 百人一首について調べ文章を書くことにより、古典についての知識・理解を深める。</p> <p>⇒「B 書くこと」(1)イ</p> <p>② 百人一首の鑑賞文とカレンダーの制作及び、できあがったカレンダーの鑑賞を通して、百人一首の世界を楽しむ。</p> <p>⇒〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕(1)ア(イ)</p> <p>③ 古筆に見られる「散らし書き」の配置・配列を生かして、より和歌の魅力が引き立つよう見栄えよく書く。</p> <p>⇒〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕(2)ア</p> <p>④ 百人一首カレンダーの制作を通して、これまでの書写学習で得た知識、理解、技能を生かした表現を工夫する。</p> <p>⇒〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕(2)ア</p> |
| 評価規準 | <p>【国語への関心意欲・態度】 自分なりの関心に基づいて和歌を鑑賞し、それを文章に書こうとしている。</p> <p>【書く能力】 論理の展開を工夫し、資料を適切に引用するなどして、説得力のある文章を書いている。</p> <p>【言語についての知識・理解・技能】 和歌の一部を引用しながら、鑑賞したことを文章に書いている。</p> | <p>【国語への関心意欲・態度】 ・「散らし書き」の配置・配列を応用して、百人一首の魅力を目視的に伝えようとしているか。</p> <p>【書く能力】 ・友だちの作品や鑑賞文を見て、感じたことを文章にできるか。</p> <p>【言語についての知識・理解・技能】 ・友だちの作品の鑑賞を通して、百人一首の魅力について、さらに理解を深められるか。 ・行書および行書に調和する仮名を、流動的な運筆で書くことができるか。</p> |
| 単元の展開 | <p>第1時 学習の見直しをもつ。</p> | |
| | <p>第2時 自分が選んだ和歌に表れているものの見方や考え方について他の人がどう思うのか、相互に取材する。</p> | |
| | <p>第3時 論理の展開を工夫し、自分が選んだ和歌について鑑賞したことを、和歌の言葉を引用しながら文章に表す。</p> | <p>第1時+宿題 学習の見直しをもつ。 和歌について鑑賞したことを文章に書く。</p> |
| | <p>第4時 書いた文章をグループで読み合い、論理の展開や表現の仕方などについて評価する。</p> | |
| | | <p>第2～5時 小筆で和歌を書く。</p> <p>第6時 作品と鑑賞文をもとに、鑑賞会にて交流し、和歌及び行書について学びを深める。</p> |

〔表3〕 古典・漢文・書写の年間計画（3学年分）

| | | | | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|------|------------|------------|----------|---------------|------------|------------|-----------|------------|--------|--------|--------|
| | | | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
| 1年 | 国語 | 単元 | | 葉書の書き方 | 漢字ポスター | 原稿用紙の使い方 | | 学校案内パンフレット | | | | | | |
| | | | | | 故事成語【光】【学】 | | | | 竹取物語【光】【学】 | 宇治拾遺物語【学】 | | | | |
| 2年 | 国語 | 単元 | | 平家物語【学】【三】 | | 短歌【学】【三】 | | | 漢詩【学】【三】 | 徒然草【学】【三】 | | | | 柿山伏【三】 |
| | | | 選択書写 | 単元 | 筆順 | 楷書の学習 | 行書の学習① | | | 場面に応じた書き方 | | 行書の学習② | | |
| 3年 | 国語 | 単元 | | | | | | | 俳句【学】 | 漢詩【学】 | 奥の細道【学】【三】 | | 枕草子【学】 | |
| | | | 選択書写 | 単元 | 行書の学習① | 行書の学習② | 百人一首カレンダーを作ろう | 行書の学習④ | | 楷書の学習 | 3年間の学習のまとめ | | | |

【光】国語，【学】学校図書「中学校国語」，【三】三省堂「現代の国語」中学校3年生「行書の学習」では、『平家物語』を書写している。

④-2 生徒について

生徒は、これまでの学習によって、第2学年で学んだ行書の特徴について理解を深めており、また、行書に調和する仮名の書き方とその調和のさせ方についてもある程度の理解ができている。さらに、小筆の扱いについても、これまでの学習で馴染みが深くなっており、抵抗感は低いと思われる。（表3）

単元のゴールは、グループで百人一首を書き記したカレンダーを制作し、それを学級で批評し合い、百人一首の魅力を書かれた文字を見て改めて味わうことにある。ここままで必要とされる知識技能は以下の通りである。

- a 季節に適した和歌を選択する。
 - b 古筆の鑑賞を行い、「散らし書き」の配置・配列を用いて、和歌の魅力を視覚的に伝える紙面構成を考える。
 - c 行書および行書に調和する仮名の流動的な運筆を意識して書く。
 - d 書き上げた作品について、筆者のコメントと和歌の鑑賞文と合わせて鑑賞し、評価する。
- 単元の最後の時間に、クラス全員が全員の作品の鑑賞交流を行う。

⑤ 単元のねらい

- ア. 百人一首の鑑賞文とカレンダーの制作および、できあがったカレンダーの鑑賞を通して、百人一首の世界を楽しむ。
- イ. 古筆に見られる「散らし書き」の配置・配列を生かして、より和歌の魅力が引き立つように書こうとする。

- ウ. 百人一首カレンダーの制作を通して、これまでの書写学習で得た知識、理解、技能を生かした表現を工夫する。
- エ. 百人一首について調べ文章を書くことにより、古典についての知識・理解を深める。

⑥ 単元の評価規準

- A. 友だちの作品や鑑賞文を見て、感じたことを文章にできる。
- B. 「散らし書き」の配置・配列を応用して、百人一首の魅力を視覚的に伝えようとしている。
- C. 行書および行書に調和する仮名を、流動的な運筆で書くことができる。
- D. 友だちの作品の鑑賞を通して、百人一首の魅力について、さらに理解を深めることができる。

⑦ 単元計画（全7時間）

〔表4〕 「百人一首カレンダーを作ろう」の計画

| 時 | 日時 | 学習内容 |
|-------|------------------|--------------------|
| 第1時 | 8/31 3校時(50分) | 【百人一首の鑑賞文を書く】 |
| 第2時 | 7/7 2校時(40分) | 【行書とそれに調和する仮名を調べる】 |
| 第3時 | 9/1 5校時(40分) | 【レイアウトを考える】 |
| 第4・5時 | 9/5 1・2校時(40分×2) | 【行書のリズムを感じながら書く】 |
| 第6時 | 9/8 1校時(40分) | 【まとめ書き】 |
| 第7時 | 9/15 5校時(50分) | 【鑑賞会】 |

(2) 指導の実際

単元計画の中で、古典の領域に踏み込んで学習した第1～3時、7時の計4時間について記述する。

(2)-1 第1時

(2)-1-1 概要

① 「百人一首カレンダー」の作り方を把握する。

1月から始まるカレンダーで、6枚綴り(1-2月頁, 3-4月頁, 5-6月頁, 7-8月頁, 9-10月頁, 11-12月頁), 6人のグループで1年分を制作すること。(7人のグループは、1月と2月を分け7枚綴りにする)。

② 担当月にふさわしい歌を資料集あるいはインターネットを使って選び、[図1]に示したように下記の項目についてまとめる。

- ・担当月 ・選んだ歌
 - ・担当月にその歌がふさわしい理由
 - ・作者について ・句切れ
 - ・表現技法 ・歌意
 - ・(調べ学習をふまえて) 鑑賞文
- *調べ終わらなかった部分は夏休みの課題

[図1] 鑑賞文

(2)-1-2 鑑賞文の実際 *抜粋

以下は、生徒の書いた鑑賞文の実際である。

「春過ぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山」

こうしてみると、美しい乙女たちの衣が神聖な山に干されている様は、一枚の絵をみるよううつくしさであると、僕は思うのです。

「心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花」

言葉の意味が分かりにくく、どのような様子を詠んだ歌かというのは分かりません。しかしそれが逆に個々のがそれぞれの情景を思い浮かべることのできる十人十色のおもしろさがあると思います。……中略…… 和歌というものは古くさくて嫌でしたが、調べると意外におもしろくて驚きました。

「田子の浦にうち出でてみれば白妙の富士のたかねに雪は降りつつ」

ほくはやっぱり原歌よりもこっちの方が好きで、本当にそんな風景が見えているわけではないのに、想像して詠んだものにこんなにも風景をくつきりとイメージさせられるのに、驚き、感動したのが理由です。……中略…… ほくはそう大な景色を想像できるダイナミックな感じの歌が好きです。

「朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪」

S1 たった三十一字にその時の気持ち、景色の美しさなど、こめてある百人一首は、今さらですが、すごいなと感じました。まだ一つしか調べていないけれど、他の季節の歌についても調べてみたいなと思いました。

S2 雪をかぶった山々の美しさもさることながら、春には桜の名所として有名なこの吉野は、今も変わらずに人の心をなごませてくれるのだと思います。僕はこの句について調べて、これからもそんな吉野を守っていかな強く思いました。

「風そよぐならの小川の夕暮れはみそぎぞ夏のしるしなりける」

S3 現在の大晦日と同じ大きな区切りであるこの行事からは清涼感が感じられ、夏の暑さを忘れられるようだと思います。榎の葉が風にそよぐ様子も、涼しい印象を与えています。また、この歌には本歌が二首あり、八代女王の歌と源頼綱の歌を踏まえています。この歌からの派生歌もあり、どれも夏の終わりを感じさせます。

S4 川辺の涼風に癒され水が罪を洗い浄める家隆の描いた夏のしるしを感じるようなものがある時代を生きた人々の日本人らしい感

性には感動しました。神社に行くときに手を
 浄めることについてあまり深く考えていなか
 ったので、日常的に川で洗い浄めている人々
 の伝統が今に伝わっていると思うと、深い意
 味があることを考えました。今度から決まり
 としてではなく、伝統としての風習について
 も考えてみると思います。

「ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく
 花の散るらむ」

私は、桜が散っていく様子は春らしいと思
 ったのでこの歌を選びました。しかし、筆者
 は、桜が咲いているのを春らしいと感じ、春
 が去っていくのをなごりおしく感じて詠んだ
 のではないかと感じました。この違いは、私
 の感じ方の浅さに対し、筆者は読みが深いと
 ころにあるのだらうと思いました。歌をよん
 で、新しい考えを知ることができたし、昔の
 人は、今はそんなに目をとめない風景をここ
 まで深く読めることも分かりました。きれいな
 情景を、私も詠めたらカッコいいと思いました。
 「ほととぎす鳴きつる方をながむればただ有
 明の月ぞ残れる」

百人一首は現代に通じる恋愛歌が多いけれ
 ど、中にはこういうホトトギスの声を聴くた
 めだけに徹夜をするなんていうほのぼのとし
 た情景だけど、平安時代に生きた貴族たちの
 心情やものとのとらえ方や価値観に思いをはせ
 ると、忙しい現代よりもはるかにいいと思う。
 「君がため惜しからざりし命さへ長くもがな
 と思ひけるかな」

義孝は命を惜しまないほど愛した女性と想
 いが通じ合っただけで亡くなってしまいます
 が、それ程までの女性と遂げられたわけなの
 で、幸せだと思います。さらに、彼の想いは
 これから先、何百年、何千年経とうと永遠に
 残り続けます。こうやって和歌にすることによ
 って、彼の人生は後世までずっと語り継が
 れるはず。だから、百人一首は百人もの
 人々のそれぞれの人生が詰まっているので
 す。先人達の思いに共感し、わずか三十一文
 字の文章を繰り返し読んで、美しい語感にひ
 たる。私はこれが百人一首の倒し身だと思い
 ました。

ければならないと

(2) - 1 - 3 考察

波線部を見ると、単に百人一首に描かれた内
 容を理解するだけでなく、その背景にある歴史
 的な状況等を踏まえた上で和歌を読み、和歌の
 世界をより深く、広く理解しようとしているこ
 とがわかる。さらに、この学習によって他の和
 歌についての興味・関心も高まっており、「書
 写」サイドとしても学習への強い動機づけにな
 ったと考える。

(2) - 2 第2時

(2) - 2 - 1 概要 (行書とそれに調和するかなを 調べる)

- ① 選択した歌が担当月のイメージに適してい
 るか評価しあう。
- ② 漢字で書写する文字を決める。(3～8文
 字)
- ③ 文字の大きさについて確認する。(漢字>
 平仮名)
- ④ 漢字(行書)、平仮名(行書に調和するひ
 らがな)を調べる

担当月の歌を選ぶ際に、次のようなカテゴリ
 ーを示した。

1月：正月 2月：恋 3・4月：春
 5・6月：新緑、梅雨 7・8月：夏
 9・10月：秋 11月・12月：冬

鑑賞文を書く際に調べたことをもとに、グル
 ープで1月担当者から順に、選んだ歌を紹介し、
 選んだ理由を発表した。ところが、異なる担当
 月であるはずなのに同一の歌を選んでしまう
 という次のような事態が複数のグループで起
 きた。

選択した歌「君がため春の野に出でて若菜つむ
 我が衣手に雪は降りつつ」

担当月：1・2月(1月) or 3・4月

S5：「春」とあるから3・4月である。

S6：「若菜つむ」は、人日の節句に七草粥を
 食べることを詠んでいるから、1月7日
 の話である。



S5は「若菜つむ」よりも「春」に注目をし、
 4月にふさわしいと判断した。一方、S6は
 「若菜つむ」に注目でき、この歌が詠まれたの
 は1月7日のことであると判断した。

(2)-2-2 考察

同じ歌について、詠まれた季節の捉えが異なったことの原因は二つ考えられる。一つは、[表5]に示したように、新暦と旧暦による季節の区分の違いである。

[表5] 新暦と旧暦の季節の区分の違い

| 季節 | 春 | 夏 | 秋 | 冬 |
|----|------|------|-------|--------|
| 旧暦 | 1～3月 | 4～6月 | 7～9月 | 10～12月 |
| 新暦 | 3～5月 | 6～8月 | 9～11月 | 12～2月 |

もう一つの原因は、担当月を決める際に、旧暦なのか新暦なのかを、授業者が確認を怠ったことにある。ちなみに、人日の節句である旧暦1月7日は、現在の2月の頃である。ただし、五節句の中でも現在の日本人にもなじみの深い端午の節句のように、旧暦5月5日であるのにも関わらず、新暦の5月5日がこどもの日として残っている風習もあり、新暦と旧暦を区別することを、学習者に求めるのは難しいかもしれない。

しかし、同一の歌を違う担当月の生徒が選ぶという事態により、

- ・旧暦と新暦の違い
- ・現代人との季節の区分の違い
- ・古来より伝わる風習

についてクラスで取り上げ、学習を深めることができた。

(2)-3 第3時

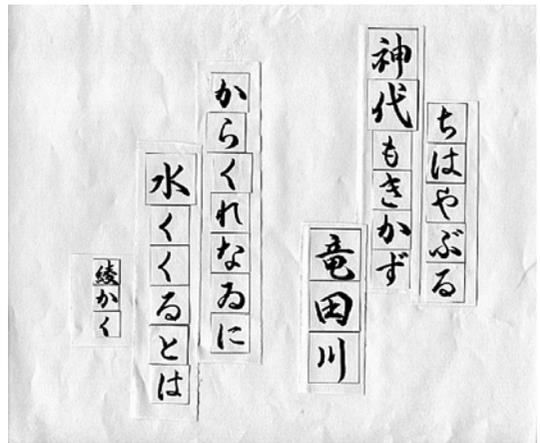
(2)-3-1 概要 (レイアウトを考える)

- ① 調べた文字を見ながら、用紙に和歌を書く。
- ② 試書の確認。
 - ・文字の大きさ ・余白 ・字間、行間
- ③ 古筆の鑑賞。
 - ・「散らし書き」とは ・行の高さ、長さ、行間の変化
- ④ レイアウトを考える。
 1. 前時のワークシートに書いた文字を短冊に貼る。
 2. 短冊を句ごとに切る。
 3. 2を散らし書きの書式にならって、用紙の上に並べる。
 4. 必要に応じて、文字を次の行に送ったり、行数を増やし、紙面に変化をつける。

(2)-3-2 レイアウトを考える学習の実際



[図2] 第2時 ワークシート



[図3] 第3時 レイアウト

第2時では、行書および行書に調和する平仮名の字形を教科書(注4)巻末の資料を使って調べて、小筆でワークシートに書いた。ここでは、生徒は文字を書くという感覚であったと思われる。それに対し、第3時は、単語に並べ替え、和歌に並べるといところからスタートし、それを見栄えよく見えるようレイアウトを考えていた。つまり、そこには「文字→単語→和歌」という過程にそった意識の変容が確認できる。事実生徒の中には、ここで脱字に気が付いた者が多くあった。また、互いにレイアウトを見せ

合ったり、授業者が机間指導したりする中で、誤字に気がつくこともあった。それらは、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いにするというミスであった。

(2) - 3 - 3 仮名遣いの指導についての考察

- しろたえ → しろたへ (白妙)
- いお → いほ (庵)
- よい → よひ (宵)
- ゆうぐれ → ゆふぐれ (夕暮)

単語として読んでいけば、生徒には全く違和感はない。しかし、文語のきまりや訓読の仕方について理解することは、第1学年での指導事項であり、抑えるべき指導項目といえる。また、文語の読み方は、古典特有のリズムを刻む重要な要因の一つでもあるという点からも、今回の生徒たちのつまずきはそれらを確認する機会となった。

このような生徒たちの課題を発見できたのは、文字から単語へ、そして和歌へと並べ替え、それを友達と見せ合う学習活動を仕組んだからと思われる。また、ノートの文字の大きさではなかなか机間指導では気づきにくことが、小筆である程度の大きさ(用紙は21.5×24cm)で書いたことにもよると考えられる。

(2) - 4 第7時

(2) - 4 - 1 概要 (鑑賞会)

[前時からの宿題]

- ・鑑賞カード [図4] を書いてくる。

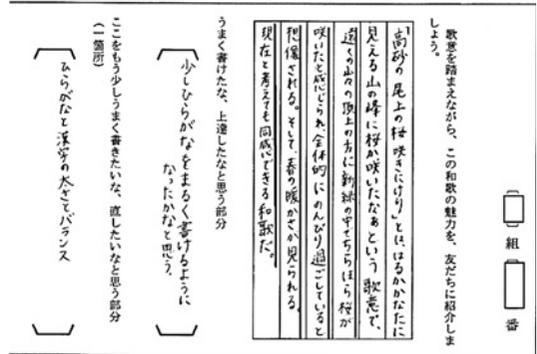
[本時]

- ① 鑑賞会用ワークシートに名前を書く。
- ② 作品と鑑賞カードを決められた方向の次の人に回す。
- ③ 時間が来たら同じように次の人に回す。

* 輪になって行うプレゼント交換と同じ要領で、作品と鑑賞カードを回す方向をあらかじめ決めておき、一定時間ごとにそれらを回していき、全員の作品を鑑賞し合う。この方法は、他の人の意見に左右されないことが利点である。

[次時まで]

- ・鑑賞用ワークシートを切り分け、同じ生徒に対する全員からのコメントを1枚の用紙に貼る。



棒線は磯野による

[図4] 鑑賞カード

(2) - 4 - 2 鑑賞カード、鑑賞会コメントの実際

以下は、鑑賞カード(この和歌の魅力や、友達に紹介しましょう。)からの抜粋である。

「高砂の尾上の桜咲きにけりとやまのかすみ たたずもあらなむ」

春の温かさが見られる。現在と考えると同感できる和歌だ。

「秋の田のかりほの庵の苦をあらみわが衣手は露にぬれつつ」

撰者である藤原定家が、名君の復活を待望して収めたのかもしれませんが。今の時代によく似ている気がします。

「月見ればちぢにもこのそ悲しけれわが身ひとつの秋にはあらねど」

「私ひとりだけに、この秋が来たわけではないのに。」という言葉で、読者は筆者の心情に共感することができます。

「春過ぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山」

天の香具山には昔から霊が宿っていたという伝説とも重ね合わせた、おだやかなようでさわやかな印象も受けるし、とても響きのいい歌です。

「ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」

筆者の桜に対する惜しんでいる気持ちを讀み取ってほしいです。

「風そよぐならの小川の夕暮れはみそぎぞ夏のしるしなりける」

- ・これは自然そのものを見て書いたのではな

く、作者の恋人の部屋にあった屏風を見て、絵の中の紅葉の美しさを表したものであったところが意外で、深いと思った。

続けて以下は、鑑賞用コメントからの抜粋である。

- ・字と歌の雰囲気が出ている。
- ・この歌の魅力が端的に伝えられていてよかった。
- ・歌の雰囲気を字がうまくあらわしていると思う。
- ・すごく歌意が字から伝わってきます。
- ・紙と歌意もあっていいし、夏っぽいと思う。
- ・夏の終わりを感じさせる。
- ・とても優しい感じが句によく合っている。
- ・悲しい歌だと思ったが、その感じが出ている。
- ・行間が恋の様子をうかがえていいと思った。
- ・字の流れる感じが、この歌をうまく表現していてよかった。
- ・全体的にかすれているのが雰囲気がかもし出されていていいと思います！ 冬っぽいですね。
- ・行のあけ方などが「寂しさ」を表しているいいと思った。
- ・「春」の孤立感が和歌の意味をよくとらえていた。
- ・流れがよく、春を感じられるし、夢の始まりって名言。この歌好きです。
- ・歌も意味がすごくいいと思ったし、かすれがめっちゃうまい。

(2) - 4 - 3 鑑賞会についての考察

鑑賞カードからは、自分が調べて書いた歌の内容だけでなく、「調べる→作品として書く→友達に紹介する」という交流に至るまでの一連の言語活動の中で、その魅力を友達に伝えようという姿勢がうかがえる。

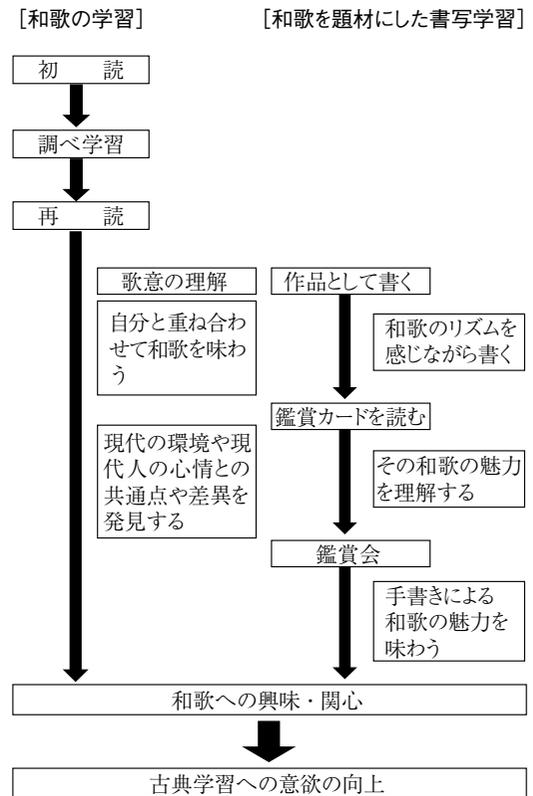
鑑賞会のコメントは、書写的な視点からのものも多かったが、鑑賞カードと合わせて作品を鑑賞したことにより、その和歌を踏まえたコメントも多く見られた。作品を見て和歌を鑑賞したのか、鑑賞カードを読み歌意を理解して作品を鑑賞したのか、その順序は生徒によって異なると思われる

が、いずれにせよ「和歌の読み取り」「和歌を書く」この二つの学習により、両者の学びが相乗的に深まったと考えられる。

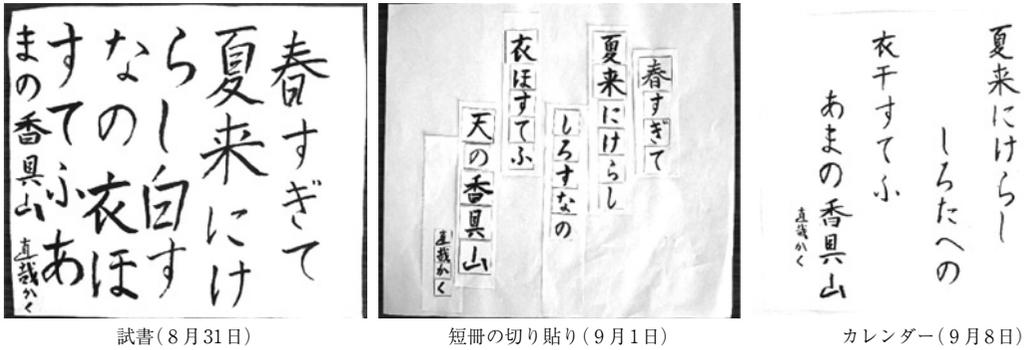
5. 成果と課題

鑑賞文（第1時）・鑑賞カード（第6時宿題）・鑑賞会用ワークシート（第7時）をみると、生徒の和歌に関する意識の変容がうかがえる。「和歌を毛筆で作品にする」「鑑賞カードで和歌を友達に紹介する」「鑑賞会で交流する」といった活動を3つ付加しただけである。もともと事例集採集の単元は言語活動が充実しているのだが、そこに相手意識を持たせた「友達に和歌を紹介するための鑑賞カードを書く」学習を入れたことで、そこまでの学習を学習者自身が振り返り、整理することができた。

本単元の活動と、そこでの学習者の理解、意識の変容を[図5]に示した。書写の授業において、和歌に対する理解が深まり、古典学習への意欲が向上したといえる。



[図5] 本単元による学習者の理解と意識の変容



試書(8月31日)

短冊の切り貼り(9月1日)

カレンダー(9月8日)

【図6】 作品の変容

書写についても、理解が深まったことが鑑賞用ワークシート等からもいえる。また、書写技能についても向上している [図6]。

磯野の実践は、書写の活動単位として「百人一首カレンダーをつくる」という言語活動を設定したものであるが、中学3年の指導事項である「身の回りの多様な文字に関心をもち、効果的に文字を書くこと」を受けて、百人一首の調べ学習や内容に対する鑑賞学習も単元に含めて構成しており、相互補完というよりも融合に近いものとなっている。「身の回りの多様な文字」への関心は、単に字体や字形のみの問題ではない。その字体や字形が用いられている背景としての文化があるわけで、それを理解しようとするはごく自然なことであり、また関心を深めるためには必要なことでもある。古典的な仮名の書きぶりは身の回りにも見られ、例えば百人一首カルタの文字に関心を持った子供が百人一首について調べることは必然であろう。このように考えると、磯野が設定したこの単元は、中学校第3学年という特殊性故に融合が可能になっている面が多分にあると言える。ごく自然な形で双方に効果をもたらすことができたのもそのためとも言えるであろう。

課題としては、一つに、今述べた両者の関係性(距離感)の問題がある。小学校低学年から見通したときに、融合的なあり方はカリキュラム編成上困難が予想されるので、あくまで間接的な補完に徹しようとしたときに、両者の関係性をどの程度にしていこうかということが、今後の実践で確認

していかなければならない課題だろう。

次に、毛筆の位置づけの明確化という点があげられる。書写にとって毛筆は、硬筆技能向上のための教具という位置づけである。これは、毛筆技能向上のための毛筆学習のあり方が、学習指導要領の改善方針である「日常に生きる」「他の学習活動に生きる」という書写の理念を損なわないようにするためである。この位置付けは学習指導要領にも明記されており、これまでも書道における毛筆と書写における毛筆の違いは各所で解説されてきたが、毛筆を使用した学習スタイルは書写と書道とで酷似しているために、一般社会や子どもには理解が難しいという事実がある。したがって、「伝統的な言語文化」と「書写」の連携を企図するのであれば、毛筆の伝統性という側面を広く文字文化という視点の中で捉え直す余地を作ることと妥協点を見出す以外にないであろう。

(補注)

1. 松本仁志著 三省堂 2009.9
2. 『研究紀要／広島大学附属中・高等学校』(第58号, 2011)
3. 文部科学省 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/senseiouen/1300990.htm
4. 『現代の書写』(一年生用・二三年生用)三省堂を使用した。